

琉球大学学術リポジトリ

小学校教師、船浮民夫先生の実践分析

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上間, 陽子, Uema, Yoko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/27295

小学校教師、船浮民夫先生の実践分析

上間 陽子*

—Analysis of the practices of the Tamio Funauki, an elementary school teacher

Yoko UEMA*

要約にかえて

本稿は、小学校教師の1年間の取り組みを、教師自身が書いた実践記録ならびに、筆者による参与観察によるデータを使って分析したものである。今回の原稿は、参与観察者である筆者が1年間の取り組みをどのように分析したのか船浮先生に伝え、次年度以降の実践展望について話をするという小さなサークルの研究会をもとにしている。

投稿に際し、いわゆる学術的な原稿として書きなおすことも考えたが、現在進行中の実践の分析ということから、教師との応答性をもとにして執筆することはふさわしいようにも思われた。したがって、本文の文体は手紙文体のままにし、その上で脚注において文献などの出典や実践の位置づけを補うことにした。

Summary

This essay will analyze one year's work of an elementary school teacher, using both an achievement report written by the teacher himself and data from observations which the author personally participated in. In addition, this essay will look at how the author analyzed one year of the teacher's work through the participant observation, as well as the results of the study session discussing prospects for future improvement in the next year which followed the author's sharing of this analysis with Mr. Funauki.

In the process of submitting this essay, I considered rewriting it in a more scholarly form, but because it is an analysis of current classroom practices, I decided that constructing it instead in a letter-like format, showing my correspondence with the teacher, was more appropriate.

本文

船浮さん、1年間本当にお疲れ様でした。赴任してすぐの学校であり、かつ困難を抱える子どもたちを多く抱える学級のなかで思い悩むことも多かったとお察し致します。

船浮さんの昨年度の実践記録（2012年6月）の

冒頭には、新しく赴任した学校には、地域でも有名な暴力をふるう雷斗という男の子がいること、そしてその子の担任になったこと、そしてその理由は「父親と暮らした経験がないので、男性担任がいいだろう」と学校側が判断し、担任になったという経緯が書かれています。ここからうかがえるのは、暴れる子どもへの対応として、同じように力を持った男性教諭の配置を行おうとする学校

* 琉球大学 教育学部

側の判断であり、おそらくこれまでもこの学校では暴れる子どもを、力でもって抑えていこうとしてきたことがうかがえます。また、春休みに他の教師から語られたその子どものことが、「暴力」「万引き」といった事件のみに特化していることから、なぜその子が「暴力」をふるい、なぜ「事件」が起こしたのかということが読み解かれることはなかったことが推察されます。こうした形で子どものことが語られている時、その子どもは、事件を起こす「危ない子」、あるいは「逸脱している子」と眼指されているのだと思います。実践記録の冒頭においてすでに示されているのは、いまから船浮さんが実践しようとしている舞台の学校は、暴れる子どもを「危ない子」と眼差し、それを抑えることによって、のりきろうとしている場所である、ということだと思えます。

それでも、私がおじゃまさせていただいた日々、船浮さんの学級にいる子どもたちは毎日の生活を楽しみ、いきいきと暮らしていたと思います¹⁾。——いくつも印象的な子どもの声や姿があります。ダンボールのなかに子どもが押し合いへし合い入っていて笑っている姿だとか、去年まで嫌なことがあると暴力をふるっていた雷斗が、校庭で学級のみんなのなかでうずくまって泣けるようになった姿とか、1年間の学級の写真の記録を子どもたちと見ていた3月14日の学級会活動²⁾で、子どもたちが「バックミュージックがないぜ！」と突然肩を組んで歌い出し、「その歌、写真に合わない！」と他の子どもたちが文句を言い、船浮さんが「校歌にしよう」とふざけ、突然校歌を歌い出す子たちが出てきてみんなで大爆笑したことなど、これからも何度も私は思い出すのではないかと思います。

おそらくこうした日々を過ごしたことは、大人になってからも「安全ではなく」「平和ではなく」「不愉快な」関わりをされた時に、「それは嫌だ」と拒否するための土台となるのではないかと思います。去年私は、船浮さんの学級に通わせていただきながら、〈夜シゴト〉をしている女性たちへの聞き取りをさせていただいていましたが、そうした「心地がいい」という土台を持っている方とそれを持っていない方の違いを感じることがありました。たとえば誰かに暴力をふるわれるような

「それは嫌ではないか」という体験であっても、今までの生活のほぼすべてが嫌な体験ばかりであるのならば、そうした体験を嫌な体験だと認識し、そこから距離をとることが難しいということです。つまり「嫌だ」という体験しかない人は、世界の体験のほぼすべてが「嫌なもの」でしかないため、「嫌なもの」と「心地よいもの」との間にあるグラデーションを持ちえません。だれかに何かをされて「それは嫌だ」と思うことができようになるためには、その対極にある「心地がいい」という体験が必要不可欠なのです。

先駆的な性教育を行なっていたことで有名な（あるいは石原慎太郎元東京都知事に実践を弾圧されたことで有名な）³⁾「七生養護学校」の実践で教師たちは、育ちの過程でネグレクトや性的虐待などを受けて育った子どもたちの水虫だらけの足を、まずお湯で洗い、足湯をさせ、その足をタオルでふき、そうしたことを積み上げることから実践をスタートさせています⁴⁾。これは、暴力を受ける可能性のある／暴力を受けている子どもたちに、まずはケアされることの心地よさを知らせ、自分がケアされないような暴力や性暴力から身を守ることを教えていくという取り組みです。七生の実践が示唆するのは、子どもたちは単に言葉で暴力を伝えれば暴力から逃れられるのではない、ということです。それから逃れるためには、安全で安心な気持ちの良い体験が積み重ねられる必要があります、それを土台とすることによってはじめてその対局にある暴力を認識できるようになるということです。

その実践を踏まえて考えるならば、船浮さんの学級で子どもたちが、安心であり安全である教室で生きることは、小学校時代においてのみ大切なのではなく、その後の生きていくプロセスで起こりうるDVや暴力から逃れていくことや、誰かに不当な扱いをされないための土台づくりという意味を持っているのだと思います。

この実践を、貧困社会で育つ日本の子どもの問題と、そして逸脱する子どもを排除しようとする学校現場のなかに位置づけることは有効だと思います。この今回の手紙は、そうしたことにつながるものとして書いています。

学級で子どもたちの関わりをつくりあげていく ——教室内クラブ活動の有効性

船浮さんが大事にされていることは、学級を子どもの生活する場所として成立させる、ということだと思います。学校は通常、「子どもに学力をつける」「何かできるようになる」という教育を行う機関だとされていますが、しかし、先進国のなかでも類をみないほど子どもに対する社会支出費が低く、貧困国である日本⁵⁾における学校は、もっと福祉的機能を持つべきだとも指摘されており、「教育と福祉の統一」が必要だと言われています⁶⁾。しかしそれを可能にするためには、行政的なバックアップとともに、何よりも子どもの生活に何があるかを見抜くことのできる教師の力量と、そして読み取った子どもの生活をさらに豊かにつくりあげていく方法を教師が模索できるかを必要としているのだと思います。こうしたことを学校で実現するために、子どもたちへの個別対応が目指されることもありますが、船浮さんが軸にしているのは、子どもたちが互いに豊かに関わりあうことを実現することにあるのだと思います。そしてとりわけ昨年は、3年生という学年であったことから、自分たちが作りたいクラブを自由に結成し、辞めたいときには自由にやめることができる「学級内クラブ活動」という方法が採用されたと思います⁷⁾。そしてその取り組みは、3年生という「遊ぶ人が友だち」である、友人との世界を豊かに作り出していくギャングエイジの発達段階の子どもたちにとって、非常に有効であることをあらためて確認できたように思いました。

さらにそうした学級内クラブ活動には、「ワニクラブ」や「Sケンクラブ」のような、ギャングエイジならではのルールのもとで、身体を使い存分に友だちと遊ぶ活動もありましたが、ルールに基づいた遊びがまだできない、いまだギャングエイジに突入していない子どもにとっても有効であることもまた、確認できたように思います。

たとえば夏ごろの雷斗は、トカゲ取りやセミ取りに熱中していたことが実践記録からうかがえますが、あの地点の雷斗は、まだルールのもとに友だちと遊ぶのは難しかったのだらうと思います。船浮さんの実践のよさのひとつは、雷斗の夢中になる世界を持つことをまずは発見し、保証し、そ

の上でトカゲやセミを自分では取れない学級の他の子どもたちにあげるという「ムシムシ株式会社」を設立し、彼がみんなに認められていく取り組みを作り出せたという点にあると思います。これらの取り組みは、それまで学校に居場所がなかった彼にとって、関わりと居場所をつくりだしていくきっかけとして、見事な仕掛けだったと思います。

こうした居場所は、何も雷斗のためにだけにつくられたものではないでしょう。先日、私に手紙をくれた鈴奈は、「4年生になっても3年生のような暮らしをしたい」と書いており、姫香はことあるごとに、「毎日誰かが泣いているけど、本当に楽しいクラス」なのだと説明していました。これは、教室という空間が、子どもたちの豊かな関わりを育み、自分たちの生活の場所となっていること、それゆえのことだと思います。もちろんそうした教室環境は、そうした教室環境であるがゆえのトラブルはつきものだと思います。「毎日誰かが泣いている」と姫香は私に伝えていましたが、それは初期の頃の、だれかがだれかに一方的に泣かされるというのではなく、学級が子どもたちにとって真剣に生きる場所になり、友だちとの関わりが深まれば当然起こるトラブルが現れるようになったのだと思います。

暴力をコントロールする取り組み

こうした日常的な関わりと居場所づくりをベースにしていたからこそ、5月に入ってから雷斗が暴力をコントロールできるような取り組みを始めることも可能になったのだらうと思います。

実践記録からは、船浮さんが次々と起こる雷斗の暴力を学級のみんで共有したことがわかります。まず船浮さんはこうした暴力がなぜ起こったのかという読み解きを学級開始の4月当初から始めますが、その頃の雷斗は、「暴力は悪くない!」「俺は、暴力は止めない!」と叫んでいたのに対し、5月の中旬になると、実は暴力を無くしたいと思っていることを話し出します。船浮さんはそうした雷斗の思いを形作りながら、それを応援しようと思っている聡介と雷斗のふたりをつなぎ、今度は雷斗と聡介と船浮さんの3人で、「雷斗が3日間暴力をしなかったらお祝いをしよう!」と

いう形で暴力をコントロールできる具体的な方法を作り出していきます。この目標達成のお祝い、雷斗に「パーティー」とよばれるもので、学校の外のコンビニで、飲み物とお菓子をひとつ買って一緒におしゃべりをするというだけのものですが、パーティーに参加するメンバーは雷斗が選んでよく、そしてそこに参加したメンバーは翌日の学級で「雷斗が暴力をふるわなかったのでパーティーをした」「楽しかった」ということを知らせていくようになります。これは、具体的に雷斗が暴力をコントロールできるようにしていくための取り組みですが、ここでのポイントは、人はひとりで暴力をコントロールできるようになるのではなく、励まされる人とともにそれができるようになる、ということだと思えます。

船浮さんの提案した目標達成の「パーティー」の実施によって、船浮さんもまた、雷斗は誰に励まされたいのかを発見し、そして実際に雷斗の周辺に雷斗を励ます人をつくり、そしてその励ましのもと目標が達成されたときにはそのお祝い、そのお祝いの場所では教室とは違うおだやかで楽しい雷斗の姿を参加した子どもとともに見つけ、そして今度は学級の皆に知らせていく、ということに取り組んでいたのだと思えます。

そうした取組みなどによって彼の仲間関係は形作られていきますが、それはやがて他の子どもにも拡大していくことがわかります。6月の中旬、雷斗が「こうさくらぶ」のダンボールハウスを壊したときに、船浮さんは壊された涼香たち女の子たちとともに、なぜ雷斗がそれを壊したのかを女の子たちと読み解きながらも、雷斗に文句をいい、雷斗が謝ることができたのは、実践のポイントのひとつになっていると感じます。

この一連の流れは次のようなものです。放課後、船浮さんと雷斗、聡介、雄が「目標達成パーティー」に出かけようとする、あらかじめ船浮さんと話をしていた「こうさくらぶ」の京香、菜々子、洋子も一緒に出かけようします。雷斗は3人に対して「なんでお前たちもいくば？(いくのか?)」と問い、その参加を拒否しようしますが、船浮さんは、「いいの、いいの、お金を出すのは僕なんだから」と子どもたちを連れだします。そしてコンビニで一緒に飲み物とお菓子を食べておしゃ

べりをしたあと、おもむろに「今日、この3人が参加したのは、パーティーでお祝いしたいからではない。昨日、ハウスをつぶされていららしているからその気持ちを雷斗さんに伝えるため、簡単に言うと文句を言ってすっきりするために来たのです。雷斗さん、あなたは聞かなければなりません。用意はいいですか」と切り出し、3人の女の子たちは次々と「雷斗のばか」「ぼけ、なんで壊すか」「あほちーん」と怒鳴り、怒鳴られた雷斗は、神妙に「ごめんなさい」と謝ります。そして彼はみんなに謝りながらも、「俺のおかげだよ。俺のおかげでジュースとお菓子を食えたんだぜ」といって、もう一度みんなに「あほ！文句言われただろ」とからかわれて、最後はみんなで大笑いするというものです。ここには子どもに要求を出させ、それを当人に受け止めさせ、だからといってその子どもを卑屈にはさせない、船浮さんならでの時間の作り出し方の特徴がよく現れていると思えます。

ところで船浮さんがここで行なっている「目標が達成できたら学校の外でお祝いをする」という取り組みは、お菓子やジュースと一緒に食べたという「楽しさ」のみに焦点が当てられるべきではない、と思えます。ここで焦点が当てられるべき点は、学校のなかでは「危ない子」と眼指されている雷斗が、学校を離れた場所であれば、追及はされたとしても、それによって自分が見捨てられるわけではないということを感じられるという点に焦点は当てられるべきだと思えます。それを裏付けるように、雷斗は次第に教室のなかでも謝ることができるようになりますが、これは船浮さんの学級であれば、追及されたとしても見捨てられることはないと感じることができたからなのだろうと思えます。したがって、ここから問題化されないといけないうのは雷斗ではなく、雷斗が暴力をふるわないと居ることのできなかつた、学校という空間なのだと思います。実践の後半において学校の外にでていく取り組みがなくなっていったのは、少なくとも教室は雷斗にとって安心できる場所になったということなのでしょう。だから実践の舞台は、学校の外である必要はなくなった、ということを示しているのだと思えます。

ところで上記では、雷斗に対する取り組みの意

味を書きましたが、他方で他の子の思いは、別途考えられる必要があると思います。私が最後に船浮さんの学級を訪れた3月19日に、京香は「船浮先生はとってもいいんだけど、雷斗とかが暴力をした時に、仕方ないよ、彼はそういう人だよというのがとっても嫌だ」と話していました。こうした教師批判ができること自体が教師への信頼のあらわれなのだと思いますが⁸⁾、京香のような、「暴力はイヤだ」という不満は当然のことであり、それは継続して取り組まれるべき課題になったのではないかと思います。学級開始初期の頃の雷斗にとって、叩かれて嫌だった、嫌なことを言われた、そのすべてが追及され、取り組みの対象とされることは、彼の居られる場所をなくしてしまうことになるのだと思います。それでも彼が居る場所をつくることができるようになってからは、「暴力は許せない」と思った子の思いを形作り、受け止め、被害を受けた子と雷斗と一緒に外に連れ出す、そこで雷斗に要求を出す、そして雷斗が教室でうけとめられるようになったら教室で話すなどの何らかの取り組みは、3月までなされていく必要があると感じました。なぜなら冒頭で述べたように他の子どももまた、理不尽な暴力にさらされる可能性があるのであり、そのためにも暴力に慣れる、ということは決してあってはならないと思うからです。

雷斗をどう捉えたか①——生育歴に色濃く見られる貧困を考える

さきほどから雷斗の名前を上げていますが、雷斗が安心できる居場所を作り出していくことは、船浮さんの去年の1年の大きなテーマのひとつであったと思います。私は、彼が随分落ち着き、幸せそうな顔を見せるようになった12月以降の教室におじゃまさせていただくようになったのですが、それでもやはりその根底に抱える生きづらさに胸が塞がれるような思いを抱く日もありました。

初めて教室を訪問した12月12日、雷斗は掃除用具入れのなかに入り、すぐ出てきて、ちらりちらりと私を見ました。自分を見てくれる、自分は居てもいいのだと十分に感じている子どもは、よそからやってきた人間に対して自分を見てくれるのか、自分を怒らないのかを試さなくても安心して

いられるので、こうしたパフォーマンスをすることはないのだと思います。雷斗の生育歴から読み解かれなれないといけないことは何でしょうか。

雷斗のお母さんは家出をして、そのたびに子どもを作って帰ってきたのだと、まだ年の若い雷斗のおばあさんが話したとうかがっています。これは、貧困のなかで育つ女性に時折あることだと思います。たとえお金が十分になくても、女性同士の関係を作ることで、暴力から逃れることができたり、助け合って子どもを育てている方はいます。でもそうした女性どうしの助け合う関係をつくるのは互惠性を媒介とするので、相当のコミュニケーション力を必要とすることだと思います。雷斗のお母さんには、そうした相手の状況を慮りながら何かをするという、女性どうしの関係をつくることを学ぶことができないなかで、男性との関係をつくることによって、なんとか生きてこられた方なのではないかと思います。念のため書いておきますが、私はそのことを道徳的に問題視しているわけではありません。そうではなく、雷斗のお母さんがそのように育ったのはなぜなのかが読み解かれなれないと、雷斗への取り組みができないのではないかと思うのです。

彼女に友人がいないこと、そして現在も通院されていることが私はずっと気になっています。そうした状況はなぜ起こっているのか、船浮さんもお母さんにお会いすることはなく、実践記録にもなかったのではっきりはわからないのですが、生育歴のなかで誰かに何らかの暴力を振るわれた、そのような可能性があることも想定しておかないといけないのではないのでしょうか。というのも、このところの調査のなかで身近な人による性暴力を知ることがあり、そしてそれは思ったよりもずっと多いのだらうと思われ、そしてそれを想定していない人にそうした現実を知り得ないということを感じさせられているからです。過去の調査において、私は女性たちからそれを聴きとったことはありませんでした。しかしこれは、なかったのではなくて、ありえないものとして考えている人に、それがあると話されるのは難しいということなのだと思います。

暴力を受けた可能性は、他にも考えなくてはならないでしょう。たとえば最近の調査の知見のひ

とつに、鈴木大介さんの『出会い系のシングルマザーたち』がありますが、その本には、貧困のなか売春をするシングルマザーたちの多くが、学校時代に女性からのひどいいじめにあつてことが描かれており、したがって社会に出てからも女性どうして助け合うことよりも、しばしば避妊にも協力せず、1万円近くで売春を買い叩く出会い系サイトで出会った男性といることのほうがはるかにマシであると認識している姿が描かれています⁹⁾。そこにあるのは、女性が女性であるだけで、女性たちから助けられるわけではない、という現実です。

これらに加えて考えておかないとならないことは、雷斗のお母さんがそのような暴力にさらされていたのならば、本来であれば彼女を育てていた、彼女の親である雷斗のおばあさんとおじいさんが、何らかの形で自分の娘を守る責任を負うべきであったのに、おそらくそれらはなされなかったのだろうということなのです。

迫害であつたり、女性からのいじめであつたり、そうした暴力の吹き荒れる中で育つた方が、そのことを誰かとともに引き受けることができないなかで、子どもを育てることはとても難しいことなのだろうと思います。それは自分自身が、ままたらなことを抱えて生きていかざるをえないからです。船浮さんの実践の端々の家族との関わりからは、雷斗は直接的な暴力にさらされながら育つた子どもであることが推察されます。雷斗の生きづらさは雷斗を生んだお母さんの生きづらさとも連動しており、世代的に連鎖がおこっていることを考えると、これまでの彼の暴力は、ある意味当然のことなのだと思います。

雷斗をどうとらえたか②——ケアの必要性

ある意味当然、ということをもう少し書きたいと思います。子どもは何も自分ではできない状態で生まれ出る存在なので、ケアをされ続けることで、世界は自分を受けいれてくれているという感覚をようやく持つことができます。つまりそのように手間のかかるはずの自分を、無条件で受けいれてくれるというもののもとではじめて、自分は世界に祝福された子どもであると認識できるのだと思います。雷斗のお母さんは、「お母さんのせ

いで、雷斗はわがままになった」と雷斗のおばあさんを責め、他方で雷斗のおばあさんは「雷斗はどれだけ殴ってもわからない」「雷斗を施設におくる」と何度も語っていることが実践記録からはわかります。こうした言葉はすべて、子どもに対して、自分は世界に受けいれられていないと感じさせてしまうものだと思います。

船浮さんは、雷斗がそうした状態で育つてきたことを認識されており、雷斗のトラブルの起きたさいには、おばあさんと雷斗の思いや指導方針を話していることは、おばあさんにとっては子育てのしんどさをわかちあい、共闘する人にはじめて出会ったような体験だったと思います。特に夏におこったカブトムシを万引きして、そのカブトムシを殺してしまった事件(実践記録：2012年9月)においては、雷斗を「もう児童相談所に預けたほうがいい」と船浮さんに言うおばあさんに対して、「施設に預けるってことは雷斗さんのためにはなりません。雷斗さんはお祖母ちゃんとお母さんから見捨てられたという思いを持ちます」、「お祖母ちゃんとぼくが謝罪する姿を見せましょう」と話しながら関わった丁寧な取組みは、まず雷斗のトラブルは雷斗ひとりでおこしたのではなく、雷斗を育てている人間の問題であることを明示し、そしておばあさんに何をしたらいいのかという具体的な雷斗に対する働きかけを提示し、その上でそれを一緒にやる教師の存在を見せることができたのだと思います。

ただ、上記の取り組み(＝大人二人で謝る姿を見せる)で十分伝わったのかもしれないと思いつつも、「これまで教えてあげられなくてごめんね」と、おばあさんや船浮先生は、雷斗に謝る必要があつたのではないではないかと思えます。なぜ万引きをした子どもに謝らないといけなと思うかということ、芹沢俊介さんの「子ども＝イノセント」という非常に優れた知見があるからです。芹沢さんの主張は、子どもは全くイノセント(無垢)な状態で生まれ落ちた存在なのであり、一切の行動、世界のなかにあるルールを破ることも許される存在であり、そうした存在であるとして周りの大人に受け入れられるからこそ、やがてこの世界のルールを守ることができるというものです¹⁰⁾。芹沢さんの知見にたつたならば、雷斗が盗んでしまうこ

とは、まずは彼にそのルールを教えられなかった周りの大人の責任なのだと思います。欲しいものをコントロールできるようにすること、そのためにまわりの大人たちもうんと知恵を絞っていくこと、そのことをこれからも一緒にやっていき、雷斗を引き受ける覚悟を示すことが、雷斗が私たちの世界のルールに生きるためには必要です。芹沢さんの知見に従えば、雷斗はそうされなくてはいけません¹¹⁾。

その上で、それが十分になされたといってもそこにとどまってはいけない、まだ足りないと思うのは、今後、そうした状況で生かされている雷斗の声をどのように引き出していくのかということを見据えた取り組みではないかと思っています。

実践記録からは、雷斗が幼い頃から施設におくるといって育てられたことや、約束した時間に家に戻らなかったことから夕食を与えられず2時間も正座させられたこと、さらに翌日になっても朝ごはんを与えられずに登校したことや、以前万引きをした時に顔が腫れるほど殴られたこと、夏休み終了間近になって円形脱毛症になったことなどが書かれています。

何かをやれば殴られ、食事を与えられず、施設おくりを宣言されながら育つということは、自分一人で生きることのできない子どもにとって、恐ろしい体験だと思います。とりわけ夏休みに円形脱毛症になったことからうかがえることは、雷斗にとっては「危ない子」と眼指されている学校よりも、家のほうがよりいっそうきつい場所である可能性があるのだということだと思います。だとすれば、こうしたやりかたで育てられている雷斗の状況は変えなくてはならないですし、そしてそのように育てられる不当性を、雷斗自身がいつかお母さんやおばあさんに訴えられるようになる必要があるのではないのでしょうか¹²⁾。

現段階で、雷斗のおばあさんと船浮さんの共関係は絶対に必要だと思います。ただしそれは最終的に雷斗の立場に立つために必要なものであり、雷斗からのお母さんとおばあさんに異議申立てするプロセスが見据えられなくてはなりません。これまで子育ての苦勞を誰にも分かち合ってもらえなかったであろう雷斗のおばあさんに、優しいねざらひは必要でしょう。ただしそれだけにとどま

てしまうのならば、おばあさんにとって、「こんなに大変な子を育てている自分のえらさや優しさ」に転化する可能性があるのではないのでしょうか。そして、「こんなに大変な子」であることを根拠にして、雷斗を「施設に預ける」ということも状況によっては、おこりえるのだと思います。雷斗が、家族にきちんと怒りを表明し、異議申立てできるのは3年生という段階では難しいでしょう。しかし今後、彼が自分の生育歴を引き受けていくためには、彼が家族に対して自分の育ちを問題化することは避けて通れないように思います。そしてそのためにも、まずは今の彼の姿は、徹底的に承認されることが必要不可欠だと思います。

雷斗の承認問題をどう捉えるか

その点について、船浮さんは学級のなかでの彼が安心していられる場所を、子どもたちとの関係をつくりあげることによって生み出していったことを先ほど書きました。それは間違いなくなされないといけない取り組みだということを指摘しつつも、それだけでは十分ではなかったのではないかということについて、以下では論じます。

雷斗は、気に入った人には自分の「指がなること」を見せたり、人よりも自分の身体が大きいことを話したりしますが、そうした彼の諸々の行為は、自分ができていることを認めてもらいたがっていると思います。私は、雷斗がそれを話に来た時には、「ほー、すごい」と聞き入ったり、「雷斗は大きくて、優しい優しい人になるね」などと話してきました。雷斗はそうした言葉をとても嬉しそうに聞くので、私は船浮さんに「雷斗はもっと認められたがっている」と12月にも話しました。それは承認されることの少ない雷斗が、世界に受け入れる体験としての意味の重要性を指摘したいと思ったからです。でも、それは十分に伝えることができなかつたように思っています。その話をしたときに、船浮さんは「彼は正直だよ、他の子どもみんなそうだもんね」といっていましたが、彼の承認を求める行動の意味と、「他の子」の承認を求める行動の意味は違うものではないのでしょうか。それはあらかじめ世界に受け入れられている子が、そのことを確認したいという意味と、いまだ世界に受け入れられていない子が、その基盤をつくり

あげていく意味の違いがあるのだと思います。生育環境において、他の子よりも多くのことを背負わされた雷斗には、自分が自分のままで世界にうけ入れられていると感じることはできていないのではないのでしょうか。だから、まず雷斗が生きていること、今日も学校にきたこと、こういったことがら自体がもっと応援されて励まされる必要があります、そして、ただ彼が存在していることが嬉しいというメッセージが発せられることが必要なのだと思います。

これを船浮さんが一人でやるのは相当難しいと思います。雷斗になぜ支援ボランティアなどがつかなかったのか私にはわかりません。しかし、それを実現する必要があるでしょうし、学校や行政に船浮さんが働きかけていくしかない、と思います。雷斗が学級でみんなと一緒に過ごせるようになったことは、絶対に必要なことであります。ただし、ゴールではありません。雷斗が常に承認を感じられること、このことは、いろいろなレベルでおこなわれるべきです。学校にいる他の教師、あるいは彼を担当する教師などによって、彼はもっと励まされるべきです。そしてそうした励ましを感じることで、彼は学びの世界にも入っていけるのだと思います。

学びの世界に入っていくために考えなくてはならないこと

彼は学びの世界にはいったのか。これはわずかな時間しか教室にいなかった私には十分わからないかもしれないのですが、現段階で考えていることを書いてみたいと思います。船浮さんの授業は、特に総合の授業を強みとするものだと思いますが、ここではその授業の面白さと不十分さについて考えてみたいと思います。

総合の授業では、東日本大震災、世界のなかの貧困問題、少年兵、フクシマの放射能問題、発達障がい、性同一性障害といった、いま現に起きている数々の社会問題をどのように考えるかというものがあったと思います。これらを受けて、政見放送に興味を持つ子どもがいたり、オスプレイの配備に憤りを表明する子どもがいたり、10歳という年齢であったとしても子どもは子どもなりの正義感と分析力で社会のことを考えることがわかり、

こうした学びを取り上げていくことは有効だと思いました¹⁹⁾。花蓮は「船浮先生は、いいと思う。他の先生は、貧困とか、障がいのとか、そういうこと話さないさ。でも船浮先生は、そういうことを話してくれるから。」と語りました。そしてこのような形で世界について学ぶことは、多様な人間が存在していること、そしてすべての人間が存在しているのだという、普遍的価値の追求と繋がっていったのだと思います。ですが、それは雷斗にとっての学びだったのか、ということは問われなくてはなりません。

おそらくこうした総合の学びは、原田真知子さんの実践をベースにしていたのだと思います。原田さんもそうした学びによって、普遍的価値の追求とともに、それぞれの子どもの発達課題へ取り組んでいます。しかし原田さんの学級にいる子どもの抱える問題と、雷斗の抱える問題には、やはりずれがあったのではないかと私は思います。

というのは原田さんの実践は、親に捨てられて、貧困を生きる子どもたちを主題とした学びではないからです。たとえば最近の原田さんの実践にはイブキの実践がありますが、実践記録からは、彼が学校で暴力を振るう荒れる子どもであったとしてもイブキの父母はイブキを大事にしており、イブキもまたとりわけ母親を好きであることが描かれています。イブキの家族は、豊かではないかもしれませんが、商店街にずっとある商店を営んでおり、地域や学校には彼の居場所があることがうかがえます¹⁹⁾。イブキは、その暴力性ゆえに学校ではそれが揺らがされることはあったとしても、家に帰れば承認される子どもです。イブキは総合の学習のなかで「少年兵」に強く反応し、暴力について考えていったことがわかります。おそらくイブキにとっては、親を目の前で殺され、力こそ全てと教えこまれる少年兵の「強いられた暴力性」について考えることは、学校で暴力を振るってしまう自分とのテーマの連なりがあるからこそ可能になった学びなのだろうと思います。しかしそれでも、彼が根底的な土台においては、すでにその存在を承認されている子どもである点が見逃されてはなりません。

世界の問題について考えるとともに、自分との連なりを考え、普遍的価値へ接近していくという

学びのスタイルは、船浮さんの教室のなかでも、たくさん子どもたちがそれを一生懸命考え、心を揺さぶられたのだと思います。ですがそれらの子どもたちは、イブキと同じようにやはり根底的にその存在を承認されている子どもたちだったのではないかと、私はいま思っています。

この間、学級通信に掲載されていた、国語の授業で『三年峠』をやったあとの、子どもの感想を読んでいて抱いた違和感について考えていました。そこには、心配症のおじいさんと、楽観的なトルトリの、「あなたはどっちタイプ？」という問いかけがあり、それに対する子どもたちの応答が学習の最後のまとめとして掲載されていました。でも、このような問いだて自体が、あらかじめ自分について考えることができ、自分は何者なのかを語ることでできる子どもにとっての学習スタイルなのではないかと思えます。同じく、総合の授業で展開された世の中の理不尽さの学びは、すでに承認の基盤をえている子どもにとっての意味のある学びではないかと思えます¹⁰⁾。さきほど雷斗は、そうした自分を認めてくれる承認の基盤を十分持ち得ている子どもではない、と私は書きました。現地点の彼には、一見自分と運動しない社会のさまざまな問題について考えることも難しいし、あるいは「あなたはどっちのタイプ？」などという問いかけをされても、そもそも自分を形作ることがむづかしいのであるから、その問いかけの意味がわかりづらいのではないのでしょうか。

6月末に雷斗とどのような学びを創りだしているかを船浮さんと話し、雷斗の家には犬や猫がいるということを知り、フクシマで犬や猫を飼えなくなった人たちがどのように過ごしているかというドキュメンタリーのDVDをお渡ししましたが、やはり彼はその授業に乗らなかつたという話でした。それは彼の状況がそうさせなかつたのかも（「今日雷斗さん爆発してしまった、その後だったから落ち込んで見ることができなかった」とうかがったのですが、いま私は、子どもが承認の基盤を欠いて成長することのしんどさをまったくわかっていなかった、と思われています。

3月19日、子どもたちは1年間の作品を綴り、自分の好きなイラストで表紙を飾り、作品集綴りをつくるという時間がありました。私は雷斗の作

品集綴りを手伝っていたのですが、雷斗は自分で絵を描くことができずに、ひっきりなしに「聡介みたいな絵、かける？」「優斗みたいな絵、かける？」と私にリクエストを繰り返していました。私は雷斗のリクエストを受けて表紙にイラストを描いていたのですが、雷斗がまず、教室にいる彼が好きな子どもたちが表紙にどのような絵を描いていることを知っていることに驚き、雷斗のなかに、みんなを羨ましいと思う気持ち、そしてみんなと同じようにやりたいという気持ち、そして自分には絶対にできないという気持ちがあることを知り、ひりひりと胸がいたみました。結局雷斗は、漢字で自分の名前だけをまん中に書いてそれで大満足だったのですが、それは漢字で自分の名前をかけるという誇りがあるから、書けたのだと思えました。

勉強がわからない子であっても、居場所さえあればなんとかなるといふ、関係論的に子どものことを捉えることの盲点はここにあると思えます。絶対的な承認は、子どもが生きるために必要であり、それを欠いたなかで育つ子どもには、まずは安心で安全な居場所がなによりも必要とされるでしょう。しかしそれだけで十分かというところではなく、ある時期から何かができるようになる、みんなに認められるようになるということによって自己が承認される基盤が形成されるのだらうと思えます¹⁰⁾。学校のなかで多くの時間、子どもが受けているのは、授業という学びの時間です。そして学びには必ず訓練的な要素がつきまとうと思えます。学びにおけるそうした訓練的な側面と、承認の側面はしばしば切り離されて考えられると思いますが、実際にはそうではないでしょう。字を学ぶとき、絵を描くとき、子どもは励まされ続けることによって、字を書き、絵を描くからです。そうした認められる体験なしに、子どもは学ぶ世界に入っていきことはできないのではないのでしょうか。雷斗がみんなと同じようにはかかないのは、「うまくできない」からだと思えます。そうした「うまくできない」という体験をこれまで学校の中で続けてきた雷斗には、自分がそこでみんなと同じようにできると思うことはむづかしいのではないのでしょうか。今後、雷斗が学校のなかで何かできるようになるためには、たくさん励ましが必要とされると思えます。そしてそのことによ

て、学びの世界に足を踏み入れることはないのではないのでしょうか。

もう一度繰り返します。彼に対しての学びの援助は絶対になされるべきです。そして、みんなのように読めてかける、教室でわからないことが少ないという状態をつくりだし、授業時間でも居てもいいんだと感じられるようになることによって、総合の授業で展開されているような、社会のなかの理不尽な思いをさせられている人と自分との連なりを考えることができるのではないのでしょうか。関係論と学びの関連について理論的に詰めることができているのですが、私は教室に安定的な居場所が確保されることは絶対に必要だと考えており、それは関係論的に形成されることもあり、他方で学びという形で形成されることもあると思いますが、いずれにしてもそのふたつとも学校のなかにいる子どもにとっては、必要不可欠であると考えています。船浮さんは、居心地のいい学級づくりをこれまでのように徹底的に続けつつ、授業で子どもがわかる、書くようになる、計算できるようになる、そうしたことにによりいっそう深く着手すべきだと考えます。

もちろん今回の実践は、雷斗を「危ないもの」として排除しかねない学校のなかで取り組まれた実践であることを考えると、こうした点に踏み込めるのかという疑問はあります。ただはつきりいえるのは、もし彼が大人の男の身体になって取り組もうとするのならば、それは性の問題やもっと鋭い暴力の問題をはらんでしまうのだろうということです。3年生、4年生というまだ子どもの身体である今の取り組みであるのならば、幼児期の課題とギャングエイジ課題をクリアし、その後の思春期課題に移行できるぎりぎりのラインだと思います。彼が存在していることを祝福し、そして安心できる場所を作り出し、その安心できる場所で、ひとつひとつできることを増やしていくことに、今後も取り組まなくてはならないと考えます。

いろいろなことを書かせていただきましたが、船浮さんの意見もまた聞かせてください。

引き続き実践を注視しています。今後ともよろしく願います。

(2013年4月5日記)

【注】

- 1) 学級訪問は12月11日、12月18日、12月25日、1月18日、3月14日、3月19日の全部で6回。11日と18日は8時20分から11時過ぎまでの時間だったが、それ以外は掃除時間まで過ぎた。なお本文中の名前はすべて仮名となっているほか、内容を変えない程度の変更を行なっている。
- 2) 学級では、デジカメを子どもたちが自由に使うべく、子どもたちが帰ったあと、教師が写真をパソコンにバックアップし、そのなかから翌日の学級通信に掲載する「教室こぼれ写真」を選ぶ。したがって子どもが子どもをとった写真が、毎日の記録として蓄積されている。ここでみたスライドショーは、1年間の写真の記録となっており、学級内クラブをして遊ぶ子どもの姿や、大ブームだったSケン、バトルロイヤル、かんとく、水風船などの記録のほか、片付けられない子どもたちの机の周りや、机をひっくり返して泣いている雷斗、給食を食べられない女の子たちがこっそり給食を返している写真もあった。
- 3) 加藤秀一、『知らないと恥ずかしいジェンダー入門』、朝日新聞社、2006年、167頁～169頁。これは、七生養護学校で、石原元都知事、東京都議員、教育委員長、産経新聞が教材を没収し、教師たちを更迭し、授業ができないようにした事件である。加藤はこの事件を考えると、この授業をつぶした人々に対して、「はらわたが煮えくり返るような怒りをどうしても抑えることができません」と述べている。
- 4) 金崎満、『七生養護学校事件』、群青社、2005年、65頁。
- 5) 阿部彩、「データで見る現代日本の子どもの貧困」、『子ども貧困白書』、明石書店、2009年、19頁～29頁。
- 6) 竹内常一・佐藤洋作編、『教育と福祉の出会うところ』、山吹書店、2012年。
- 7) 篠崎純子・溝部清彦、『がちゃがちゃクラスをガラッと変える』、高文研、2006年、94頁～98頁。
- 8) 京香の言葉は学級通信に掲載され、1年間の実践の弱点だったとしてまとめられている。

- 9) 鈴木大介、『出会い系のシングルマザーたち』、朝日新聞出版、2011年。
- 10) 芹沢俊介、『現代<子ども>暴力論 増補版』、春秋社、1997年。
- 11) 芹沢のこうした知見を見いだせる実践のひとつとして、鈴木和夫、『子どもとつくる対話の教育』、山吹書店、2005年をあげたい。暴力をふるうTに、鈴木は、暴力をふるわないでいられるように手立てを示すとともに、暴力をふるわないことを約束しあう。その約束を「やぶったら？」とTに問われる鈴木は、「何回でも……。約束しないですむように努力する。そのための約束だ」と話す。それにTは応答して、「約束する。約束する。やぶったらまた約束して！」という。あらゆる暴力を振るうことを許される子どもが、それをふるわなくなるためには、その子どものイノセントを引き受ける大人が必要とされる。ここでのやりとりは、子どもと大人のその応答のプロセスとして見るべきだと思う。
- 12) 家族における暴力性については「日本生活指導学会通信」内、杉田真衣氏の報告に示唆を受けた。日本生活指導学会事務局「日本生活指導学会通信」No.109、2013年3月30日。
- 13) 船浮さんのクラスでは、単に総合の授業においてのみ社会について考えるというテーマをもっているわけではない。毎日の朝の会は、「みんなに伝えたい気になったニュース」「みんなに伝えたいこと」を自由に発表することから始まる。筆者が訪問したときには、「大飯原発の再稼働」「活断層の発見」「政権交代」「尖閣諸島の緊張」「沖縄へのオスプレイ配備」などのニュースが話された。子どもが発表すると、教室にある大きな地図で、どこで何が起きているのかの確認がなされ、他の子たちからは、なぜそれが気になったのか発表者へ質問がなされる。
- 14) 原田真知子『『いろんな人がいる』が当たり前の教室に』、『生活指導』、2012年10月号・11月号。
- 15) ギデンズは、後期近代において特定の生活様式を確立し、その実現を目指す闘争がライフポリティクスだとし、それが人々の課題となることを述べている。だが萩野達史は、そうした運動の以前に、個人的な模索や試行錯誤の過程を人は必要とするのだとし、メタ・ライフポリティクスとそれを名付けた。船浮学級において、社会の特定の人が差別を受けたりしていることをどのように考えるのかという学びの作り出し方は、ギデンズにならえばライフポリティクスをめぐる問題に子どもたちも接近しているのだといえるだろう。しかし、すべての子がそのような状態にただちに移行できるわけではなく、雷斗のように虐待的な環境で育ち「捨てられる恐怖」にさらされながら成長した子どもにとっては、その手前に、まずは自分について自由に語ってよいだろうと思え、そしてそれが語られた時には傾聴される場所がつけられる必要があるということになるのだと思う。船浮さんも雷斗の生活が傾聴される機会をつくりだしている。ただし、総合の主題として展開されているわけではない。萩野達史、「新たな社会問題群と社会運動」、『社会学評論』、vol57No.2、2006年。
- 16) アクセル・ホネット、『承認をめぐる闘争』、法政大学出版局、2003年。ホネットは承認を「情緒的気づかい」「認知的尊重」「社会的価値評価」の3段階で捉えている。筆者は船浮さんの実践は、子どもたち相互の関係づくりによって承認の第一段階を徹底して創りだそうとしているのだと評価している。これはとりわけ雷斗にとっては、必ず実現されないといけないものであったと思われる。しかし、船浮学級にあって仲間関係をつくることで自己への信頼を取り戻しつつある彼は、今度は第二段階の承認とでもいえる自分のもっている能力にもとづき仲間に尊重される段階に、実践は移行できるのではないかと思う。